

## 英語 I シケプリ

※各セッションの要約を作成しました。要約の長さはバラバラですが、そこはご愛嬌。とりあえず、これは内容理解の補助として使うのがいいかもです。シケプリを過信するな、といったところでしょうか。自分で作っというのもなんですが。あ、全訳を作ってくれた皆さん、ありがとうございました m(\_ \_)m

### (セッション1)

独自性や独創性というのは、到達することを望む目的ではなく、あなたがその活動を通して、自分を成長させようとする努力に比例する結果として、無意識に得る特性である。個人主義は民主主義の基本原理の1つであり、人々は、個人として目立とうと、また他人とは「独特の」違いを持とうとしている。しかし、軽々しく他人と異なろうと努力しても、変人であるという結果に終わることがしばしばある。私たちは人間社会のシステム全体の中でのみ「私たち自身のように」意味のある振る舞いのできるのであり、それゆえ、まず第一にシステムを学ぶために大いに努力する必要があることを常に気にかけておかなければならない。

### (セッション2)

人の体型の好みは時代によって変化するものであり、その人の価値とは無関係であるが、現在、多くの人々は「体重を落とすこと」に関心を持っている。今日、食事量を制限することで脂肪を減らす方法が一般的になっているが、これではむしろ体重の増えやすい体になってしまう。ここでは、体脂肪と健康の関係・ウォーキングを通したダイエットの方法を紹介する。

今のところ、肥満と病気との関係はまだ明らかではないが、脂肪組織が内分泌器官であるという発見により、健康と脂肪の関係が明らかになりつつある。脂肪細胞は、食欲を抑える「レプチン」や脂肪の代謝を促進する「アディポネクチン」という“良い”ホルモンを分泌する一方、インシュリンの働きを阻害する「レジスチン」という“悪い”ホルモンや「サイトキネス」という動脈硬化をもたらす物質も分泌する。我々は過剰な脂肪細胞を減らすことを考える必要がある。

ウォーキングはランニングと比較して関節や循環器系に負担をかけないため、ポピュラーな運動となっている。エネルギーコストの関係から、7.5km/h のウォーキングが

効率の良い運動である。これを続けることで効果的に体脂肪を落とすことができるのである。

### (セッション3)

ハワイでは、火山活動によって造成された高い山々や深い谷が印象的である。その中の一つ、マウナ・ケアに関してある問題が起こっている。マウナ・ケアの山頂は、ネイティブハワイアンにとって神聖なものである一方、その地理的な利点から、宇宙の観測のために天文学者たちによって多くの望遠鏡が設置されている。彼らの間で衝突が起こっているのだ。ここでは、両者の意見を説明する。

我々ネイティブハワイアンにとって、マウナ・ケアの問題は政治的・経済的なものではなく、宗教的・精神的なものである。すなわち、宗教の自由などの基本的な権利が無視され、奪われてきたことである。我々は、マウナ・ケアの神々の尊厳を主張し、守り続けねばならない。

リリウオカラニ女王が述べたように、「知識の獲得は私の人生全体における情熱であり、現在においてもその魅力を失わない」。天文学者たちはマウナ・ケアに敬意を払うべきであったが、科学もまた文化であり、両者は共存していく必要があるだろう。

### (セッション4)

フェルマーの最終定理の考案から約 300 年後、東大の谷山豊と志村五郎による、楕円曲線とモジュラー形式との関係についての「谷山-志村予想」が発表された。これを利用し、1994 年、Andrew Wiles によって、フェルマーの最終定理が証明された。ここでは、谷山と志村についてのエピソードを紹介する。

ある1冊の本を巡り、谷山と志村は偶然に出会った。うっかり者の谷山と几帳面な志村は、厄介な問題の解決のために共同研究をすることとなった。戦後の状況下、日本での数学の研究は停止した状態にあり、学生が自ら研究やゼミを行わねばならなかったのだ。そのゼミの中で彼らは、当時の欧米では時代遅れとされたモジュラー形式に興味をひかれた。彼らは研究をすすめ、1955 年の国際シンポジウムにおいて、「楕円方程式とモジュラー形式は実質的に同一である」という仮説を発表した。志村は、この仮説を裏付ける証拠を発見しようと谷山とともに努力したが、彼は海外に招待され、共同研究は停止してしまった。そしてこの研究は再開されることはなかった。谷山

は自殺したのだ。

谷山の洞察はあまりに先進的だったため、その影響を彼が見届けることはできなかった。しかし、この仮説により、異なる数学の概念の「橋」渡しがなされ、数学者たちが未解決問題に取り組むことが可能となったのである。

### (セッション5)

数値化により物事が客観的になるように思えるが、それは誤りである。数値化の過程における近似化や算出の仮定などを注意深く考えることが重要である。同様に、「国際化」の考えや「世界標準」という概念が広がっているが、世界において普遍的・標準的とされているものは、ある特定の文脈における故意のものである可能性が高い。これは今日における主要な問題のひとつである。

例えば、高校物理で無視される摩擦や空気抵抗が、実際の科学では無視できない主要なものであるように、理論的科学と実際の科学の間には不一致があり得ることを認識する必要がある。

1990年代、名古屋の藤前干潟の埋め立てを巡り、推進派とNGOが対立していた。その中で、「干潟の使用割合」の算出において、双方の数値が大きく異なっていた。これは両者の定義が異なっていたためであった。推進派は、無作為抽出により平均を求めるという“理想的”な方法をとったのに対し、NGOは、現場で得た知識を反映するように作られた、“実際”の数値を提示した。ここで、どちらが科学的かという議論がなされたが、推進派は、実際の地域状況という現実と一致した数値を持ち出す必要性を認識していなかった。彼らは、近似では相対的な重要性に関する価値判断が含まれ、それは不可避にデータの集め方やデータの性質そのものに影響を与えるということを理解していなかったのである。結果的に市は1999年に計画を断念した。

### (セッション6)

「百聞は一見にしかず」という有名な諺がある。直接の経験によって得られた知識は、間接的な記事や記述によって得られる知識と比べて本質的に異なっていて、時にはより重要であるということだ。その諺がとてよく当てはまるようないくつかの種の物事や出来事がある。例えば、生きている間は、自らの死を経験することができないため、死について純粹に知ることは不可能である。

死とはどのようなものかを書いた本はたくさんあるが、それでは「死がどのように見えるか」ということは分かっても、「死とはいかなるものか」ということは分からない。しかし、失神や臨死体験をした人々の多くは、意識を失っている間、心地よさや安心感があったという。「死」につきまとう悪い噂は、いつでも、死に関する直接経験が少ない人から起こるようだ。

### (セッション7)

日本生まれの娯楽の一つにカラオケがある。しかしながら、カラオケは日本人よりも中国人にとってなじみ深いものである。世界中の華僑たちは、皆それぞれカラオケを楽しんでいるのである。

アメリカに、中国系アメリカ人の共同体が3つ存在する。研究の中で、彼らそれぞれが「カラオケの解釈共同体」として、カラオケを利用している。1つ目は香港や中国南部から来た中産階級の広東人で、彼らは年配者に対する文化的活動の代用媒体として利用している。2つ目は台湾からの裕福な移民で、彼ら自身の裕福さや競争心を表現する道具として利用している。3つ目は中国系マレーシア人で、不法移民である彼らにとっての一時的な逃げ場となっている。

この解釈共同体の人々は、現実から逃げることができる、束の間の社会的かつ象徴的な安息地としてカラオケを作ったのだ。彼らがカラオケを使うのは、歌ったり聞いたりすることを通じて、文化を共有する人々と交流する一定の社会的な場を作るためである。カラオケは共同体の人々、そして社会的、経済的状态が全く逆である人々同士でさえも関係を持つことが可能な場所なのだ。カラオケの使用は人々のニーズに合っているし、たとえ一時的であったとしても彼らを生きる方法へと導いてくれる。

### (セッション9)

我々は、人々が他の生き物を殺さずに生きることができないということや、地球への感謝の気持ちを表す必要性を覚えていなければならない。コーヒーは単なる飲み物ではなく、地球や人々やその土地の水からその命を授かったものなのである。

人々が言うように、今はグローバリゼーションの時代なのではなく、グローカリゼーション、すなわち、「世界的／地域的」という両極の状態が、同時に至る所で混ざり合った時代なのだ。このような時代では、多国籍企業だけが力を伸ばし続ける。コーヒ

一を扱うドイツのある多国籍企業は国と癒着しており、生産国よりも消費国であるドイツが多額の利益を得ているのである。一地方の支配的な多国的ビジネスは、ポストモダンでポスト産業主義的であるように思える一方、生産者たちは、まるで前近代的で、全産業主義的に扱われている。これは世界化というよりむしろ、植民地主義とポスト植民地主義、前近代と近代が恐ろしくひとつに混ぜ合わされていくようなやり方で、世界の人と地方の人と一緒に崩壊させていくような「グロテスク化」であろう。

### (セッション10)

ここ200年間、ヨーロッパやアメリカ、アジアによる植民地化の影響で、ポリネシア文化は急に変わった。宗教、食事、輸送手段、家、意思疎通、生活のあらゆる面が植民地化の影響を受けたのだ。同様に、ポリネシア文学も大きな影響を受けた。昔のポリネシア文学は、文字で書かれることはなく、口承されていた。それは、儀式において詠唱されていたり、思ったことを言うものだったり、あるいは、部族の神話、歴史、家系のような大事な知識を残すための記録としての役割もした。

ポリネシア人たちは詩を好むが、彼らの詩は植民地化の影響を受けてできた新たな文化や世界観を提示している。40を超えるポリネシアの言語を全てアンソロジー化することはできなかったが、これは彼らの言語の多様性を表している。このアンソロジーが今日のポリネシアの詩を正しく映し、将来の基準点となり、あらゆる教育段階の人にとって有益な教育材料になることが望まれる。

### (セッション11)

物は、私達とそれとの関係が変わると、意味を変える。別の言い方をすれば、物との関係が変わらない限り、その意義は保たれる。このような意識を持って周りを見渡せば、実際物体は私達の気づく以上に私達の見方を制限している。物体はとても限られた方向で、私達をそれらに関連付けようとしているからである。

写真はその点において、写真家と物体との関係を表す物である。多発性硬化症を持つ Martin Bruch はよく転ぶが、転ぶごとにその視点から写真を撮っており、それは今まで誰も撮ったことのないような景色であった。一方、彼は車のトランクを撮る。なぜなら「そこは公の場所での個人的な領域だから」で、人前で転ぶ事ほど個人的かつ私的な事はないからである。

Susan Sontag いわく、「写真は単なる映像ではなく、現実の解釈をするものである。また軌跡でもあり、本物から直接写し取った、足跡や死面のようなものである。」と。Martin Bruch の写真は、その意味では、「生きている証」なのだ。